

運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童への指導等の在り方

保健体育課

■ 新学習指導要領「体育科」において

新学習指導要領の体育科改訂における改善の具体的事項の一つに「全ての児童が、楽しく、安心して運動に取り組むことができるようにし、その結果として体力の向上につながる指導等の在り方について改善を図る。その際、特に、運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童への指導等の在り方について配慮する。」ことが示されました。そこで、今回は運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童への指導等の在り方について紹介します。

■ 児童の実態を捉え、思いを探る

体育の授業では、運動がもつ楽しさや魅力（運動の特性）を児童に味わわせるために、授業づくりを工夫しています。その際、児童が苦手意識をもっている要因や楽しさを阻害している要因を捉え、児童の思いを探ることが必要です。事前のアンケートや学習カード等で把握することもできますが、運動に取り組む姿や児童相互のかかわりを観察する中で把握することもできます。児童の思いに寄り添うことで、教師は何をするべきかが見えてきます。



■ つまずきへの対応策を考える

授業を進めていく上で、児童が出合う課題やつまずきを想定し、その手立てを考えることはとても大切です。今回改訂された小学校学習指導要領解説体育編では、各運動領域の内容の中に「運動(遊び)が苦手な児童への配慮の例」と「運動(遊び)に意欲的でない児童への配慮の例」がより具体的に記載されています。以下は、第3学年及び第4学年「器械運動」の内容から一部抜粋したものです。

◎ 運動が苦手な児童への配慮の例

開脚跳びが苦手な児童には、マットを数枚重ねた上に跳び箱1段を置いて、手を着きやすくしたり、跳びやすくしたりして、踏み切り一着手一着地までの動きが身に付くようにするなどの配慮をする。

◎ 運動に意欲的でない児童への配慮の例

技への恐怖心がある児童には、落ちても痛くないようにマットを敷いたり、回転しやすいように鉄棒に補助具を付けたったりして、場を工夫するなどの配慮をする。

配慮の例を参考にしながら、授業における場づくりや児童への言葉がけなど手立てを工夫し、「全ての児童が、楽しく安心して運動に取り組むことができる」体育の授業づくりを進めましょう。

■ 教材づくりを工夫する

例えば、中学年のゲーム領域において、児童に運動の特性を味わわせ、指導内容を身に付けさせるためには、以下のような点に留意しながら、教材づくりを工夫することが必要です。

- ① 児童の興味・関心に配慮しながら、発達の段階に応じた課題が提示されていること
- ② 全ての児童が達成感を味わい、ゲーム等での学習機会が平等に保障されていること
- ③ 挑戦すべき課題が明確であり、運動のおもしろさが含まれていること

その際、「人数を減らしたり、コートやルールを工夫したりすることで、運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童が、ボールに触れたり、得点したりする機会が増えるかもしれない。」という視点をもって、教材づくりを進めましょう。教師が「運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童から学ぶ」という姿勢が大切です。

■ 達成感を味わわせる

運動が苦手な児童、運動に意欲的でない児童は、その運動に対する経験が少ないことや「できた」という達成感、「もう少しでできそうだ」という経験が不足していることが考えられます。児童に自信をもたせるために、段階的な課題（三つ程度のスモールステップ）を設定し、達成感を味わわせるように工夫しましょう。

【段階的な課題の設定例】

- ① 全ての児童ができる課題
- ② 場や条件を変えてできる課題
- ③ 自分たちで工夫してできる課題



段階的に課題を変えていくことで、児童は「もう少しでできそうだ」と目を輝かせながら、意欲的に課題に挑戦していきます。全ての児童が成功体験を得られる授業づくりを進めましょう。

■ 学ぶ雰囲気をつくる

児童が生き生きと活動している授業は、学習する雰囲気明るく、児童相互の教え合いや励まし合い、補助などの肯定的な関わりが見られます。また、授業場面において笑顔が見られ、歓声が上がり、喜ぶ姿が多く見られます。成功したら「ナイス」、失敗しても「ドンマイ」など、肯定的で受容的な雰囲気が、運動が苦手な児童、運動に意欲的でない児童の気持ちを和らげます。全ての児童が安心して学ぶことができる雰囲気を教師が理解し、学級全員でつくり出していくことが大切です。

